

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(30)

石原 昌家

前回、沖縄の中野学校出身者の任務は、四つに大別されることを記したが、そのうちのひとつの離島工作員(残置謀者)についてこれらとりあげていく。とはいえ、連載13、14回(本年3月14日、15日)で離島残置謀者について、「伊是名島虐殺事件」のかかりです。伊是名島では、漂着した3米兵が虐殺されたうえに、

「奄美の3少年」と本部村(現在町出身の家畜商)チナスが非国民・スパイ視されて虐殺された事件に伊平屋島に潜入した中野学校出身者がかわつていられることである。

配置先

ここで沖縄戦中の離島残置謀者が潜入した島々を既刊本に基づいて記しておく。校友会誌『陸軍中野

学校』によると、斉藤義夫(旧姓菊地、偽名宮城太郎)・伊平屋島、馬場正治(偽名西村)・伊是名島、宮島(偽名山川)・黒島、高谷敏朗(偽名柿沼秀雄)・与那国島、仙頭八郎(旧姓阿久津、偽名山本政雄)・与那国島、酒井清(偽名山)

離島残置謀者たち

夫中尉(琉球大学元学長)の下では、非常にやさしい存在だった。しかし、45年1月、波照間島へ山下虎雄先生として潜入した後は、残置謀者としてその態度は豹変したという。軍力を抜

刀して島人を脅迫し、悪性マラリアが猛威を振るう西表島南風見へ、全住民に「退去命令」を下したので

年7月に私が聞き取り調査を実施したのが予備調査の形になっていた。その時の聞き取り調査内容をふまえて、次世代へ戦争体験を継承することが最大の目的であった。

身分隠し島々に潜入

米上陸備え、少年を訓練

「強制疎開は軍命」

酒井氏(旧日本軍)が証言



戦争マラリア
「強制疎開は軍命」
酒井氏(旧日本軍)が証言

波照間島住民の西表島への強制疎開について、酒井喜代輔氏のインタビューを報じた1989年8月6日付琉球新報

平和祈り

波照間島

いずれも島人に身分を秘匿するため、正規の国民学校訓導または青年学校指導員の辞令を真知事に発給させた。潜入先の島々で米軍上陸に備え、少年たちに遊撃戦、ゲリラ戦の幹部養成と戦闘技術の訓練・組織作りや陣地構築を秘密裏に行っていた。

まず波照間島に潜入した山下虎雄についてとりあげたい。第4遊撃隊から西表護郷隊へ派遣された山下虎雄は、西表護郷隊で、酒井喜代輔軍曹として高良鉄

台湾人虐殺事件

『沖縄県史』に書かれた台湾人虐殺について山下は、琉球新報記者が直接取材した1986年8月6日付同紙記事で「絶対にそういふことはなかった。疎開地に台湾人が二度と来ない

ある。4月8日、第一陣が南風見へ向かったが、蚊の発生とともに島人が心配していたおりに悪性マラリアが発生して病死者が続出した。

島に関する部分「スパイ交際して島の救世主」「牛馬一干頭の焼肉」と「日本の空襲一九沖縄」(三省堂、81年)の「第六章沖縄の遊撃隊(ゲリラ部隊)」を2カ月近く読み合わせたうえで、調査票も作成して波照間島へ渡った。

(次回は12月後半掲載)